

Richardson の小説における “half” の使用法  
—18 世紀の英語辞書と照らし合わせて—

脇本 恭子

0. 序

日本語の「半」を使った複合語には、「半球」「折半」「過半数」や「四半期」「後半生」といった単なる「数量」を表すものもあれば、「生半可」「半可通」「半信半疑」といった「程度」を表すものもある。「半分眠った」「半分投げやりで」<sup>1)</sup>のような副詞的な用法も、「半ば～」という「程度」を表す。また、「半人前」のように「能力のなさ」「未熟さ」に繋がるものや、打ち消しの語を伴って(例:「一言半句もおろそかにしない」)強い否定を表すものも、長きにわたって日本語に根付いている。

「半(分)」と “half” が日英で全く同じ働きというわけではないが、英語の “half” も “half-circle,” “half an hour,” “half-dollar” といった文字通り物理的な「数量」を表すものもあれば、“half sick,” “half educated,” “half suspect” のように、「程度」を表す副詞として形容詞・分詞、動詞、他の副詞や副詞句を修飾するものもある。さらに、“half-baked” (underdone, raw → deficient in intellect; silly)<sup>2)</sup>, “half-portion” (a half of a portion → a small or insignificant person)<sup>3)</sup> のように、本来の意味から比喩的な意味へと拡張したものや、以下の Jane Austen (1775-1817) からの例のように、“not” を伴って強い否定を表すものもあるなど、日英で共通部分が多々見られるところである。

“Lizzy is not a bit better than the others; and I am sure she is not half so handsome as Jane, nor half so good humoured as Lydia.” (*Pride and Prejudice*, Vol. I. Ch. 1, 4)

物理的に数値で言い換えられる “half” の場合とは異なり、「程度」「度合い」を表す “half” は必ずしも厳密に半分である必要はなく、その使われ方はこの語に後続する要素によって微妙に異なり曖昧である。この “half” の持つ曖昧さに着目し、登場人物の心理的陰影を描写するのに応用した作家の一人が、脇本 (2007, 2008) でも考察した Samuel Richardson (1689-1761) である。

それでは、この “half” は 18 世紀の辞書に、どの程度慣用句や副詞、連結形(複合語)の用法として記載されていたのか、本稿では脇本 (2017) のアプローチと同様、Samuel Johnson (1709-1784) の『英語辞典』(*A Dictionary of the English Language*, 初版 1755:以降 *Dr.J*) 前後の後期近代英語期の主な辞書を調査することにより導き出す。他方、脇本 (2007, 2008) の考察を基に、Richardson の 3 つの書簡体小説及び『模範書簡集』(*Familiar Letters*) に見られる “half” の例を、当時の代表的作家の使用と比較しながら吟味・分析する。上述の Austen に少なからぬ影響を与えたと思われる Richardson の文体的特徴を、当時の辞書に照らし合わせて考察すると共に、“half” 使用法の技巧を浮き彫りにしていく。

## 1. 18世紀の辞書：Dr. Johnsonの『英語辞典』以前

*Oxford English Dictionary CD-ROM*版（以降 *OED*<sup>2</sup>）によると、名詞の“half”の初出年は700年頃に遡るなど、歴史的にはOld English（以降OE：古英語）の時代より使用されている日常語で、品詞としては名詞、形容詞、副詞に加え、（この“half”そのものの形では極めて稀であるが）動詞の用法もある。<sup>4)</sup> 形容詞・分詞を第2要素とする連結形としての *half* もOE期より既に見られるが、Present-day English（以降PE：現代英語）においては、*OED*<sup>2</sup> や *OED* の online 版（以降 *OEDonline*）<sup>5)</sup> の膨大な収録数からも窺えるように、造語力の極めて高い語である。このように多岐にわたり使用されている“half”であるが、初期の英語辞書ではどのような扱いであったのか、まず *Dr. J* 以前の主要辞書に遡り調査する。

*Dr. J* 以前に初版が刊行された辞書では、例えば John Bullokar の *An English Expositor*（初版 1616）が挙げられるが、改訂された 1707 年の第 10 版（*THE English Expositor IMPROVD*）における副題の“Being a Complete DICTIONARY, TEACHING The Interpretation of the most Difficult Words, which are commonly made use of in our *English Tongue*”に示されるように、難解語の意味を解説する用語集としての役割であったため、脇本（2017）で調査した“self”の場合と同様、“half”のような日常語についての言及はない。

18世紀は新聞や定期刊行物の創刊に伴い、それまでの伝統であった難解用語集から日用の一般語彙の収録された進歩的な辞書が次々と出版されている。John Kersey<sup>6)</sup> 編纂の *A NEW English Dictionary: Or, a Compleat COLLECTION of the Most Proper and Significant Words, Commonly used in the LANGUAGE*（初版 1702：以降 *NED* と略す）では、*Or* 以下の副題が示すように、難語に限らずあまねく語彙を収録しており、“half”の定義も“*The Half, or moiety of any thing*”と記されている。しかしながら慣用句の記述はなく、複合語も初版において“*A Half-moon*”が記載されているだけで、1713年の第二版、1731年の第三版、1739年の第四版においても“*Half; as, half a Loaf, etc.*”と記されているに過ぎない。但し、同じ編者による *Dictionarium Anglo-Britannicum: OR, A GENERAL English Dictionary*（初版 1708：以降 *DAB*）は、説明の一部に“To which is Added, A Large Collection of Words and Phrases”と示されているように、“half”の定義だけでなく、一項目ではあるが句も入れられ、*half* の複合語もいくつか収録されるようになっている（次ページの【表 1】参照）。

続いて、Nathan Bailey の編纂した *An Universal Etymological English Dictionary*（初版 1721：以降 *UEED*）は 30 版も版を重ねた辞書であるが、“half”については語源と簡単な定義のみで、複合語は少数に留まり、しかも初版から 1800 年の第 28 版まで複合語の数は殆ど増えていない。当時の主要辞書の特色については、既に脇本（2017）の中で触れているのでここで詳細は述べないが、その他 Abel Boyer の *THE ROYAL DICTIONARY ABRIDGED*（初版 1708：以降 *RDA*）、Thomas Dyche と William Pardon 共編の *A NEW GENERAL English Dictionary*（初版 1735：以降 *NGED*）や Benjamin Martin の *Lingua Britannica Reformata*（初版 1749：以降 *LBR*）についてもほぼ同様の扱いで、語法や複合語、慣用句についての記載は殆どない。

参考のため、次の【表 1】には、これらの辞書に記載されている句・複合語をまとめて、それぞれ品詞と *OED*<sup>2</sup> の初出年を併記しておく。<sup>7)</sup>

[表 1]

	品詞	初出年	収録辞書
Half and whole compasses	<i>n.</i>	-----	<i>DAB</i>
Half-files	<i>n.</i>	1672 <sup>8)</sup>	<i>DAB</i>
Half-bord	<i>n.</i>	記載なし	<i>UEED</i>
†Half-bloom	<i>n.</i>	1678	<i>UEED</i>
Half-brother	<i>n.</i>	c1330	<i>RDA</i>
Half-communion	<i>n.</i>	1660	<i>RDA</i>
Halfendeal	<i>n.</i>	c1000	<i>UEED (Obs. exc. dial.)</i>
†Half-mark (or noble)	<i>n.</i>	a1056	<i>DAB</i>
Half-moon	<i>n.</i>	1530	<i>NED, DAB, UEED, LBR, RDA, NGED</i>
Half-pence	<i>n.</i>	-----	< half-penny (c1330) <i>NGED</i>
Half-penny	<i>n.</i>	c1330	<i>DAB, UEED</i>
†Half-seal	<i>n.</i>	1509-10	<i>DAB, UEED, NGED</i>
Half-tangent	<i>n.</i>	記載なし	<i>LBR</i>
Half-tongue (or party-jury)	<i>n.</i>	1494	<i>DAB, LBR, NGED</i>
Half-verse	<i>n.</i>	1711	<i>RDA</i>
†Half-witted	<i>adj.</i>	c1645	<i>RDA</i>

“half-files,” “half-pence” のように複数形が見出し語になっているものや、*OED*<sup>2</sup> には全く用例がなく、PE では完全に廃語になっている語も見受けられる。また、“half-moon,” “half-seal,” “half-tongue” を除くと、辞書間で扱う語は総じて一致しておらず、どの語を収録するかは各々の編集者によることが窺える。ちなみに、*UEED* に収録されている “half-bord” の “bord” は、*OED*<sup>2</sup> によると “a shilling” の意味で、†マーク付きの “*Thieves’ cant*” である。*UEED* にも “cant” として “six-pence” の意味で記載されているが、*OED*<sup>2</sup> の用例も 1567 年、1611 年、1688 年で、辞書の発行年より一時代前を反映する語である。いずれにせよ [表 1] には、“half-witted” 以外は「程度」を表す語はない。

## 2. Richardson 以前の散文を分析資料として

他方、フィクションの中では “half” がどのように用いられているのか、前セクションで扱った辞書と同時代の散文から “half” の使用法を比較・考察する。この時代はちょうど小説の勃興期にあたり、代表的な作家は Ian Watt の *The Rise of the Novel* (1957) で指摘されているように、リアリズムを追求した Daniel Defoe (1660-1731), Richardson, Henry Fielding (1707-54) であるが、その中で Richardson の *Pamela* (1740-41) に先立って作品を出した作家は Defoe である。ここでは Defoe の *Robinson Crusoe* (1719, 以降 *RC*) と *Moll Flanders* (1722, 以降 *Moll*)、及び同時代の風刺作家である Jonathan Swift (1667-1745) の *Gulliver’s Travels* (1726, 以降 *GT*) のコーパスを活用して “half” の使われ方を調査する。<sup>9)</sup>

まず、*RC* では総語彙数約12万6千語のうち “half” は75回使用されており、その具体例は次の通りである (( ) 内の数字は頻度が二回以上の場合の数値を表し、複合語については網

掛けで表示する) :

**RC(1719)**: “half a day,” “half a Dozen,” “half a Goat,” “half a Hundred Weight,” “half a League (4),” “half a Mile (9),” “half a Minute,” “half a Peck (2),” “half a Year,” “a Year and half (5),” “half an Hour (8),” “~ Foot and a half (5),” “Half April (2)/ August (2)/ February (2)/ October (2),” “half as much Prudence,” “a League and a[an] Half (2),” “half Circle (3),” “**half dead**<sup>10)</sup>,” “(a[one]) half of Barley/ of it (=Plantation)/ of Powder (2)/ of the Produce/ of their Miseries/ of us,” “a Dozen and a half of Linnen<sup>11)</sup>,” “gone half,” “my half peck of Seed,” “**Half-Pikes**,” “~ League(s) and Half’s Distance (2),” “within half Shot,” “**half** the Extravagancies of his Affection,” “the other Half,” “half Way (2),” “Half your Stock”

同様に *Moll* を調べると、総語彙数約13万7千語のうち “half” の起こる回数は31回で、*RC* の半数にも満たないが、その具体例は以下の通りである :

**Moll(1722)**: “half a Crown,” “half a dozen of (3),” “half a Minute,” “half a Year (4),” “an Hour and a Half (2),” “half an Hour (3),” “*l.* 20 for it, of which I had half,” “**Half Crown**,” “**half dead**,” “half her Stock,” “this **half Hour**,” “half<sup>12)</sup> it with her,” “one half (=children),” “above half of it (=fourscore Guineas),” “half out of her Wits,” “half Peoples,” “not half so Handsome,” “half the Children,” “half the Money,” “three Guineas and a Half,” “Eaten half,” “this half Year,” “the half yearly Dividend”

続いて、*GT* は総語彙数約10万7千語のうち “half” は69回で、具体例は以下の通りである :

**GT(1726)**: “within half a Cable’s Length,” “half a day’s Journey,” “half a Dozen (2),” “half a League (5),” “half a[an] (English) Mile (7),” “half a Pint (2),” “half a Stang,” “half a Yard (2),” “half an Hour (12),” “~ Foot and a[an] half (4),” “~ Miles and an half,” “almost half as large as,” “the two half Brains,” “**half dead**,” “more than half diminished,” “half erazed<sup>13)</sup>,” “by almost half,” “~ foot and (a) half (2),” “~ Inch(es) and (a[an]) half high/ long (4),” “half his(the) Kingdom (2),” “~ Day(s) and a half (2),” “~ and a half in Breadth (2),” “~ Years and a half,” “**Half-Moon**,” “(a[one]) half of ~ (4),” “**half-Pike**,” “half Silver,” “one and an half,” “above half that time,” “about half the Bigness of (2),” “with half the Current of a River,” “half the Length of,” “take half the usual Rate,” “the Sun, eleven Moons and an half,” “half with Torches, and half with Bows and Arrows”

これら3作品の例のうち、“half dead”以外で多少なりとも「程度」を表すものは、*RC* では “one **half** of their Miseries,” “**half** the Extravagancies of his Affection,” “had I used **half** as

much Prudence to have look'd into my own Interest,” *Moll* では “not half so handsome” や “half out of her Wits,” *GT* では “half diminished” と “half erazed” である。<sup>14)</sup> しかしながら概ね物理的に「半分・半数」という数値の意味で、*half-compound* も “half dead” 以外では、*Dr.J* 以前の辞書にも収録されていた “half-moon,” 貨幣価値を半分とする “Half Crown,” 武器でサイズが半分の長さの “half-pike” と時間の “half Hour” のみで、「程度」「度合い」を表す例は寡少である。<sup>15)</sup> このことは、前セクションで調査した辞書のケースと、ある意味共通するところである。

### 3. Richardson における “half” の使用法

#### 3.1 分析資料

次に、Richardson の作品における “half” の使用法は如何なるものか、まず、ここで分析する3つの書簡体小説と『模範書簡集』の略記を以下に記しておく<sup>16)</sup>：

- ・ *Pamela* (1740-41) : *Pam* → *PamI* (1740), *PamII* (1741)<sup>17)</sup>
- ・ *Clarissa* (1747-48) : *Cl*      ・ *Sir Charles Grandison* (1753-54) : *SirCG*
- ・ *Familiar Letters* (1741) : *FL*

語形成の面より考察した脇本 (2007) では、*Pam* のみの分析に留まり、三作品を扱った脇本 (2008) においても、他のいくつかの合成語の調査との兼ね合いで総花的にまとめたに過ぎない。よって本稿では一步踏み込んで、Richardson の作品の中で “half” がどのように使用されているのか、同時代の他の作品と比べて何に特徴が見出されるのか明らかにしていく。

さて、脇本 (2007) の調査結果によると、*PamI* における “half” の頻度は他の18世紀の作品に比べて決して多いというわけではなかった。<sup>18)</sup> それでは Richardson に多用されている “half” の言い回しとはどのようなものか、以下に続くセクションでは、具体的に例を挙げながら吟味・考察する。

#### 3.2 心的状態を表す句として

##### 3.2.1 “half+det.+noun”<sup>19)</sup>

*OED*<sup>2</sup> の全用例の中で “half a noun” を型とする表現は、例えば “half a dozen,” “half a mile,” “half a pint,” “half an hour” など時間や数量の定型句が大多数を占める。定冠詞の場合も、例えば “half the time,” “half the size/length/height/weight/width/breadth of,” “half the members/people of” など同様のことが言える<sup>20)</sup> Richardson の作品にもこれらの定型句が多く使用される一方、以下の様な表現も見られる：

- (1a) I am more than half a fool. (*SirCG*, Vol. VI. 290)
- (1b) I have learn'd her to be half a rogue in this instance; (*Cl*, Vol. V. 87)
- (1c) I expected half a Word from me, (*PamI*, Vol. II. 252)
- (1d) And who can be contented with half a heart? (*SirCG*, Vol. V. 204)
- (1e) You don't know, Sir, half the excellencies of my dear mama! (*Cl*, Vol. IV. 239)

(1f) O that I was Master of half your Caution and Discretion! (*PamI*, Vol. I. 206)

(1c) について、*OED*<sup>2</sup> の *n.* の III. 24 “half a word” によると、“a very short utterance, a slight fragment of speech or conversation” という意味で、1700 年と 1865 年の二例しか用例がないが、*PamI* だけで 3 度も使用されている。<sup>21)</sup> (1d) の “half a/an heart” は *SirCG* に 6 回使われているが、*OED*<sup>2</sup> の “heart” の *n.* の II. 39. b の項には (“with half a heart” で) “half-heartedly, with divided affection or enthusiasm” (初例 1636 年) で記載されており、当時、既に慣用句として通用していたと思われる。*SirCG* には、同様の表現として “half a hint,” “half a life,” “half a suspicion,” “half a thought” などがある。

また、以下の (2a) の様に数詞の誇張法 (hyperbole) に /h/ の頭韻 (alliteration) の効いた節や、(2b) の様に “half” をもう片方の “half” と相関的に用い、さらに名詞と動詞の “sigh” を掛けた言葉遊びも見られる：

(2a) after half a hundred hums and haws, told me, that he came . . . (*CI*, Vol. VI. 199)

(2b) She then went to her toilette, and looked in the glass, and gave half a sigh—The other half, as if she would not have sighed could she have helped it, she gently hem’d away. (*CI*, Vol. I. 120)

(2a) に挙げた不特定多数を表す “half a hundred” 以外にも、“half a dozen” を用いた例も見られる (例えば、“half a dozen Questions” (*PamI*), “half a dozen kisses” (*CI*) や、「何回も」という頻度に “half a dozen times”)。さらに、数量を示す意味として、文字通りには “a group of twenty”<sup>22)</sup> である “score” を伴った表現も以下の様に見られる：

(3a) The poor Mabell, frightened out of her wits, expected every moment to be torn in pieces, having half a score open-claw’d paws upon her all at once.

(*CI*, Vol. V. 375)

(3b) Miss Grandison told me, that, if her brother married, half a score women would break their hearts. (*SirCG*, Vol. II. 100)

(3c) whenever he married, he would break half a score hearts. (*SirCG*, Vol. I. 191)

(3d) The words half a score run as glibly off the tongue as half a dozen:

(*SirCG*, Vol. II. 100)

*SirCG* に “half a heart” が 6 回使われていることは既述の通りであるが、“break half a score hearts” も *SirCG* だけで 4 回使用されており、それらはすべて上掲の (3b)(3c) と同じ文脈である。“half” で緩和されているとはいえ、厳密に 10 人という数を示すものではなく、主役の Sir Charles Grandison がいかに魅力的な好人物であるかを際立たせるのに用いられている。(3a) も同様に、“half a score” が物理的に中立の数値ではなく、書き手の感情移入が窺われ、(3d) では “half a score” と “half a dozen” の言葉遊びで、いかに “glibly” であったのかが強

められている。他にも、“half a score Mouths” (*PamI*), “half a score devils” (*CI*), “make half a score jealous” (*CI*), “half a score more of her admirers” (*SirCG*) のような例がある。ちなみに、*OED*<sup>2</sup> の引用文には “half a score ~” が 34 例あるが、後続の要素は、例えば “half a score children/galleys/Packs (of Cards),” “half a score of horsemen/tailors/the passengers/bouncing girls/Dubboites” など、殆どが文字通り中立の数値に関するものである。

### 3. 2. 2 “half as[so] *adj.*[*adv.*] (as ~)”

比較の対象に対して「~の半分」という物理的な数量・頻度に繋がる “half as many/much as,” “half as frequently as,” “half as big/large/small/long/heavy/deep as” といった定型句は、どのジャンルの書き物にもよく出てくる。無論、Richardson の作品にもこのタイプの定型句は頻出するが、他にも以下の (4a) ~ (4c) の様な祈願文や (4d)(4e) の様な条件文の中によく現れ、特に “but” を伴うことが多く、そこには強い感情の含みがある：

(4a) O that my Miss Harlowe were but half so acknowledging!<sup>23)</sup> (*CI*, Vol. III. 88)

(4b) O that I were half as good! (*SirCG*, Vol. VII. 92)

(4c) May I, . . . , with a happier lot, be but half as deserving! (*SirCG*, Vol. VII. 31)

(4d) If she is but half as pretty, and half as wise, and modest, as you, I shall . . . be ready to think better of the Matter. (*PamII*, Vol. III. 319)

(4e) had his Soul been half as noble as hers, he thus resents: (*PamII*, Vol. IV. 87)

また、次の様に “as ~ as” の前後が対照を成す皮肉を込めた表現では、読者の冷笑を誘う：

(5a) And yet a woman’s Pockets are half as deep as she is high. (*CI*, Vol. IV. 7)

(5b) If you had half as much sense as you have ill-nature. (*CI*, Vol. VI. 229)

“as[so] ~ as” の間に挟まれる要素は、後ろの “as” 以下の節 ((4a) ~ (4c) の様に省略される場合も多々あるが) で比較される内容を強調する形容詞・副詞である。他にも、“I have only to wish I may be half as worthy as you are” (*PamI*), “if he be but half as good an Husband, as she will make a Wife” (*PamII*), “Be half as happy as I am” (*CI*), “If ever thou lovedst(*sic*) but half so fervently as I love” (*CI*), “half as amiable in her eyes, as she is in mine” (*SirCG*), “Think but half so charitably of me, as I do of every one” (*SirCG*) の例から窺える様に、強調される要素は「評価」「感情・情緒」「態度」など人の心的状態を表す形容詞・副詞である。

### 3. 3 否定語と結びつく “half”

“half” が否定語と結びつき、名詞が後続する例も多く見られる。例えば以下の (6) である：

(6) Will you forgive me, if I try to look upon your brother’s generosity to me and my friends, in declining so greatly their offers, as a bribe to make me sit down

satisfied with half, nay, not half, a heart? (*SirCG*, Vol. VI. 56)

(6) には、“half a heart” と “not half a heart” の違いが微妙に現れ、“half” が厳密な「半分」を表すのではなく、心の機微を映す繊細な表現になっていることが窺える。

また、前セクションで扱った構造の否定形 “not half so *adj.*[*adv.*] (as ~)” も多用され、「序」の中で挙げた Austen の例と同様、“half” が否定語と結びつき強い打ち消しを表している：

(7a) for my Master, bad as I have thought him, is not half so bad as this Woman!  
(*PamI*, Vol. II. 37)

(7b) I am sure I never had a Child half so dear to me as you! (*PamI*, Vol. I. 41)

(7c) And yet none of these Creatures are half so wilful and proud, or half so desirous to be Masters of themselves, as Men. (*PamII*, Vol. IV. 358)

(7d) tho' we are none of us half so bad as thou art, (*Cl*, Vol. V. 378)

ところで、Richardson の作品には (7d) の様な “you” から “thou” へのシフトがよく起こる。これに関して古い文献ではあるが、Richardson の言語を分析した Uhrström が以下の様に指摘している通り、“thou” の使用は話者の感情の高ぶりを示す指標となる：

**Thou** was in Richardson's time still used as a confidential word of address to inferiors, between very intimate friends, in sentences of pathetic content, and in expressions of anger and contempt. The interchange of *thou* and *you* is constantly made use of by Richardson to mark the differing emotions of his characters. (Uhrström, 1907: 110)

他にも名詞が後続する例には “not half the Excellence” (*Cl*), “not half her nobleness of mind” (*Cl*), “not half the sense of my Father” (*Cl*), “not half the arrogant bravery of the other” (*Cl*) など、形容詞・副詞が続く例には “not half so bad as this woman” (*PamI*), “not half so artful as her mother” (*PamI*), “I am not half so culpable as I am imagined to be” (*Cl*), “not half so clever as he” (*SirCG*), “not half angry enough” (*SirCG*), “not half so grateful as the blackbirds” (*SirCG*) など枚挙に暇がない。Richardson の小説には様々な否定表現が出てくるが、この “half” においても否定語との共起の方が圧倒的多数で、浮き彫りにされる要素は肯定の場合と同様、名詞であれ形容詞・副詞であれ、主に感情・評価に繋がるものである。

### 3.4 *half* の多用

#### 3.4.1 副詞と連結形

さて、(8a) ~ (8c) の例の様にハイフンのある場合は、通常 *half* を連結形とする複合語として見られ、他方、(9a) ~ (9c) の例の様にハイフンがないと、複合語と解釈されることもあれば、“half” が後続の語を修飾する副詞と解釈されることもある：



(8a) She half-astonished me by her answer; (*Cl*, Vol. II. 36)

(8b) I half-mistrust the girls . . . (*SirCG*, Vol. VII. 191)

(8c) I am half-afraid of my judges; (*SirCG*, Vol. VI. 189)

(9a) I half pity'd him: (*FL*, Let. CLXIII.)

(9b) So he came up to me, as I have said, and amused me about Mr. Williams, to half prepare me for some surprise; (*PamI*, Vol. II. 103)

(9c) As I hope to live, I am half afraid of you. (*SirCG*, Vol. III. 67)

ハイフンが付くということは、*OED*<sup>2</sup> の *half-* の項に “the use of the hyphen mostly implies a feeling of closer unity of notion in the compound attribute” と記されているように、それだけ *half-* との結びつきが強いということではあるが、PE の場合とは異なり、句読法が厳密に確立されていなかった時代においては、連結形なのか副詞であるのかをハイフンを基準に区別することは難しい。それ以前に、*OED*<sup>2</sup> の用例や作品の版によってハイフンのあるなしが変わってくることもある。<sup>24)</sup> セクション 2. の “half dead” の注でも触れたが、形容詞の場合、一般的に限定用法ではハイフン付きで、叙述用法ではハイフンなしが多いが、(8c) の “half-afraid” と (9c) の “half afraid” の区別はつかない。(9b) の点線部では “half” を副詞とすると、to 不定詞と動詞の間に副詞が入る分離不定詞 (split infinitive) となるが、この場合、“half” を連結形として “half-prepare” という複合動詞と解釈することも可能ではないかと思われる。よって、本稿では、文脈上意味的に結びつきが強いと思われるものについては、ハイフンがあるなしに関わらず、*half-* の複合語として広く解釈することにする。

### 3. 4. 2 Richardson の小説の原点 *FL* より

文才に恵まれとりわけ手紙文の名手であった Richardson は、交流のあった同業者より依頼され *Familiar Letters* (Letters Written to and for Particular friends, on the most Important Occasions) を出版したが (初版 1741 年)、この『模範書簡集』は彼の書簡体小説の礎である。*FL* は総語彙数が 8 万語足らずで、“half” の表現も以下の 16 例しかない：

**FL** (1741): “Half a Benefit,” “half a dozen (3),” “half a Line,” “half (=Cyprus wine),” “my **Half-bit** of Gold,” “**half-dead**,” “**Half-moons**,” “the **Half-pint** Man,” “half pity'd,” “half so often as,” “half the fine Things,” “half the Flutter,” “half the Pleasure,” “half the Society”

しかしながらセクション 2. で扱った *RC*, *Moll*, *GT* の場合とは異なり、「程度」に繋がる例が約半数見受けられる。中でも以下の “half-pint” に注目したい：

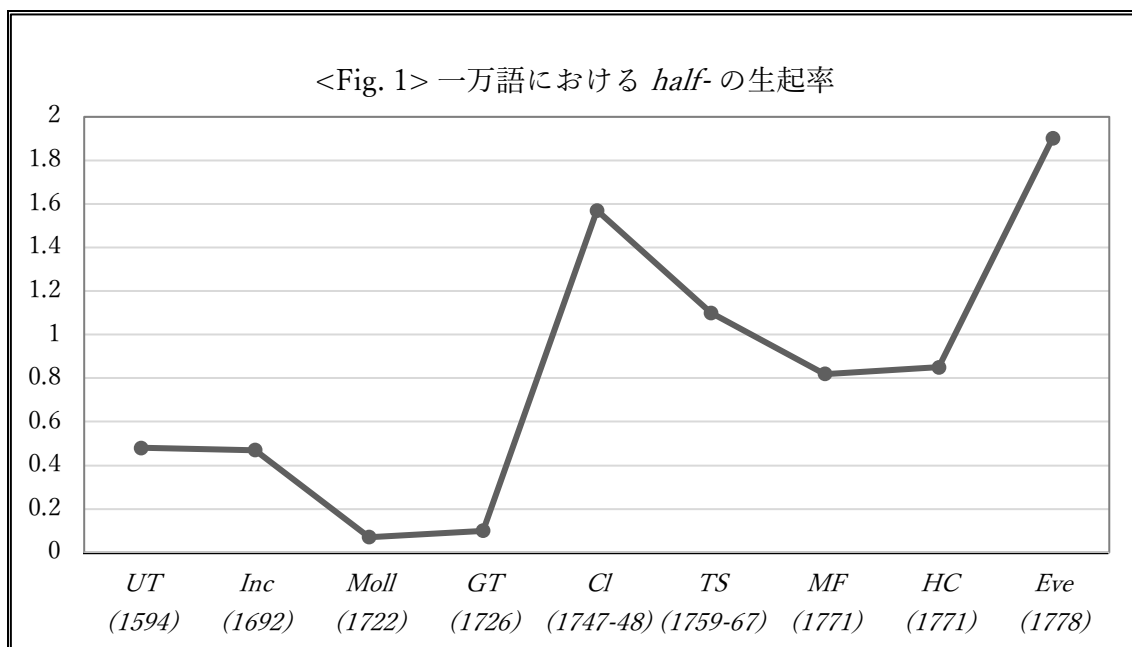
Brackley, the Half-pint Man, who was always sotting by himself, with his Whets in the Morning, his Correctives after Dinner, and Digesters at Night, and at last tipp'd off of one of the Kitchen-benches in an Apoplexy. (*FL*, Let. LXXVI.)

“A humorous Epistle of neighbourly Occurrences and News, to a Bottle-Companion abroad.” というキャプションの書簡で、飲酒にまつわる話からの一文である。“half-pint” と言うと文字通りには “a half-pint of beer” が典型的な句であるが、ここでは朝から “whet” (*i.e.* a small draught of liquor; a dram, a drink) で “sot” (*i.e.* to drink to excess) し、ついには “tip off” (*i.e.* die, *slang* or *dial.*) した男性を形容する語として使用されている。<sup>25)</sup> “who” 以下は “always” を伴う “emotional coloring” (感情的色彩) が付与された進行形で、<sup>26)</sup> 「相も変わらず」「仕方のないやつだ」などといった心情を含み、 (“Half-pint Man” なので「大酒飲み」とまではいかないまでも) 飲酒が日常化していたしがたい男性のなれの果てを、半ばペイソスを交え批判する様子が窺える。

ちなみに、“half-pint” は人を表す比喩的な意味として、*OED*<sup>2</sup> の *half* の II. n. の項に “*fig.*, a small or insignificant person” と記載され、“also *attrib.*” と続くように、限定用法の形容詞にも転用されている。但し、初例は *OED*<sup>2</sup>, *OEDonline* 共に 1926 年で用例のすべてが PE なので、Richardson が比喩的な形容詞用法として使用したかは定かではない。但し、*OED*<sup>2</sup> の用例を調べると、PE の例以外で “half-pint” に続く語は “of sherry / of cartons of milk / bottle of water / of wine / of beer / Basons<sup>27)</sup> / bottle / mug / glasses” で、*FL* の例の様に人を表す語が続くものは一例もない。*FL* の “half-pint” は、その語が形容する “man” の素行に密接に繋がりが、換喩 (metonymy) 的にも響く。Richardson がいち早く人を対象に用いたことは、比喩的意味へと向かう一つの起点、あるいは途上にあっただと言えないだろうか。このように Richardson の “half” の使用は、とりわけ *half-compound* に特徴がある可能性が高い。

### 3. 4. 3 *half-compound*

さて、脇本 (2008) の調査では、*CI* の前後に著された 16 世紀末から 18 世紀下旬にわたる 8 作品の一万語における *half-compound* の生起率を調査したが、それを折れ線グラフで表したのが <Fig. 1> である <sup>28)</sup> :



脇本 (2008) の中でも指摘した通り、18 世紀中庸に発行された *CI* を境に生起率が大幅に上がり、Richardson に大きく影響され自らも書簡体小説を著した Fanny Burney (1752-1840) の *Eve* においては、*CI* を超す勢いである。これまでの考察から、またこのグラフにも現れているように、感情表出・心理描写の点では Richardson が一つの分岐点と言える。

それでは、具体的にどのような *half-compound* が使用されているのか、ここでは紙面の都合上、三作品すべての例ではなく、最後の書簡体小説である *SirCG* (Preface を含め総語彙数約 81 万語) からの例を挙げることにする：

**SirCG(1753-54)**: half afraid (12), half-angry (4), half-ashamed (6), half-asleep (2), half-awake, half-blame, half break (2), half-buried, half-careless, half-closed (2), half-comforting (2), half-conceding, half-concern'd, half condemn, half-confession, half-convered, half-crazed, half-cured, half-denied, half dined, half-disconcerted, half-distracted, half-earned, half-established, half-fainted, half-familiarized, half-fear, half-feared, half fearful, half-free, half-fretful, half-glad (2), half-good, half-grieved, half-guilty (2), half-hid (2), half inclined, half-jealous, half-laughing, half-lifted, half-mad, half madman, half-mistrust, half overcome, half paid, half-pity, half-pointing, half-pronounced, half punctilious, half raillied, half-raving, half ready (2), half-reluctant, half resolute, half roguish, half-saucy (2), half serious, half shut, half-sigh, half-slighted, half-slouched, half-smiled, half-sob, half-sorry, half-stranger, half-sullen, half-suppressed (2), half-suspected, half-taken, half-timid, half unknown, half-unwilling, half-useless (3), half-way (10), half-whistle, half-wild, half-wildly, half-withdrawn, half-worn

脇本 (2008) の調査に合わせて、“half-hour,” “half-year,” “half-brother,” “half-pay,” “half-pence,” “half-a-crown” のような物理的に中立のもの、単に数値を表すものは除外し、「程度」「度合い」を表すものに留めている。*SirCG* は総語彙数が約 81 万語もあるとはいえ、名詞、形容詞、副詞、分詞形容詞 (特に過去分詞)、動詞それぞれと結びつきがあるなど、*RC* や *GT* といった前時代の作品と比べると *half-compound* が激増している。中には時代を先取りしたような例も見られる。例えば “half-slouched” は、*OED*<sup>2</sup> に “half-slouched” としてのエントリーはなく、“slouched” の初例も 1779 年 (“slouched hat” として) であるが、Richardson はこの初例よりも早く、しかも *half* の連結で用いている (“a mask distinguished by a broad-brim'd half-slouched hat” (*SirCG*))。

Richardson に特徴的な *half-compound* には、以下の 3 つのタイプが挙げられる：

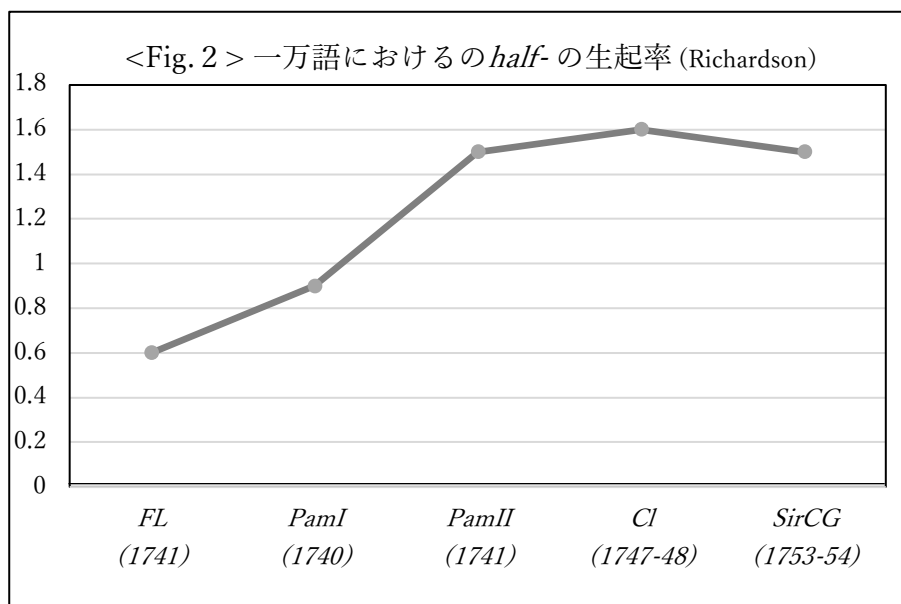
(10a) I would occasion no throb; nor half-throb; no flash of sensibility, (*CI*, Vol. II. 129)

(10b) Let me conclude this subject, half one way, half t'other—that is to say, half serious, half roguish: (*SirCG*, Vol. V. 76)

(10c) His half-distracted letter to Mr. Reeves, (*SirCG*, Vol. VII. 405)

Richardson の作品には否定表現が多いということは既述の通りであるが、(10a)においても“no throb”を含め3つの否定語が畳みかけるように続いている。(10b)では相反する意味の言葉が並列されており、一言で括ることの難しい微妙な心理状況が現れている。(10c)の“half-distracted”は表面的には“letter”を修飾する形をとっているが、書き手の心情を説明する転移修飾語 (transferred epithet) である。(10b)と同じタイプの表現には、“with a half-pleasant, half-serious Air” (*PamII*), “half-comforting her, half-laughing at her” (*SirCG*), “find them half-right, half-doubting” (*Cl*), “half-shy, half-willing, by her cowering tail, half-stretch’d wings” (*Cl*), “her half-speechless, half-fainting prostration at thy feet” (*Cl*), “the particulars of the half-fretful, half-humorous dialogue” (*SirCG*), “with an air half-grieved, half-angry” (*SirCG*), “half fearful, half resolute” (*SirCG*), “Such an half-timid, half-free parade” (*SirCG*) など頻出している。転移修飾の他の例には、“I held out my more than half guilty hand, and took it” (*SirCG*), “I took her half-reluctant hand, and led her to a chair” (*SirCG*), “I then forced her half-unwilling hand into his” (*SirCG*), “holding to him my then, through surprize, half-withdrawn hand” (*SirCG*) などが見受けられるが、特に *half-* の複合形容詞が構造上は“hand”を修飾する例が際立っている。本来は対象となる女性の心理を映し出す語であるが、ここには話者の視点が反映していると思われる。また、部分 (hand) で全体 (女性) を表すという点では、提喩 (synecdoche) 的でもある。

上述の例では最後の作品である *SirCG* に増加しているが、Richardson 自身が作品を書き進めていく上で *half-compound* の使い方に変化があったのであろうか。そこで、*FL*, *PamI*, *PamII*, *Cl*, *SirCG* の一万語における *half-* の生起率を調査したところ、以下の結果である：



<Fig. 2> の調査は「程度」「度合い」を示すものに限った上での数値であるが、Richardson の書簡体小説の原点である *FL* や最初の作品である *PamI* から見ると、それ以降の三作品では

ほぼ倍増している。さらに、Richardson の *half-* の複合語は単に数の問題だけでなく、その使い方においても多様性に富んでおり、一つの重要な文体的特徴を成すものと言える。

#### 4. 18世紀の辞書：Dr. Johnson の『英語辞典』以降

それでは、Richardson の作品以降の英語辞書では、収録語彙や語法等の説明に何らかの変化があったのか、まず 1755 年発行の *Dr.J* を調べてみる。*Dr.J* は、それまでの辞書とは異なり単に意味だけでなく、“The *I* is often not sounded.” と付記されるなど音声面への言及もある(黙字の *I* に向かう過程が窺える)。品詞としては名詞と副詞でエントリーされており、*half-compound* についても品詞別で示されている。【表 2】には、*OED*<sup>2</sup> の初出年と *Dr.J* における引用文献もしくは著者を挙げておく：

【表 2】

	品詞	初出年	<i>Dr.J</i> 中の引用文献・著者
Half-blood	<i>n.</i>	1553	Locke
Half blooded	<i>adj.</i>	1605	Shakesp. <i>King Lear</i> .
†Half-cap	<i>n.</i>	1607	Shakesp. <i>Timon of Athens</i> .
Halfendeal	<i>n.</i>	c1000	Spenser.
Half-faced	<i>adj.</i>	1595	Shakesp.
Half-hatched	<i>adj.</i>	記載なし	Gay.
Half-heard	<i>adv.</i>	1725	Pope.
Half-moon	<i>n.</i>	1530	Milton.
Half-penny	<i>n.</i>	c1330	Shakesp.; Dryden; Swift.
Half-pike (Now <i>Hist.</i> )	<i>n.</i>	1599	<i>Tatler</i> .
Half-pint	<i>n.</i>	1611	Pope.
Half-scholar	<i>n.</i>	記載なし	Watts.
Half-seas over	---	1551	Dryden.
Half-sighted	<i>adj.</i>	a1626	Bacon.
†Half-sphere	<i>n.</i>	1611	Ben Johnson.
†Half-strained	<i>adj.</i>	1682	Dryden.
†Half-sword	<i>n.</i>	1552	Shakesp.
Half-way	<i>adv.</i>	c1386	Granville.
Half-wit	<i>n.</i>	1678	Dryden.
†Half-witted	<i>adj.</i>	c1645	Swift; <i>Arbuthnot's Hist. of John Bull</i> .

慣用句としては“half-seas over”のみの記述であるが、それまでの辞書に比べ、*half-compound* の収録数はかなり増えている。ただ Richardson や Richardson 以降の作家が用いた心理描写に繋がる語の記載は未だ殆ど見当たらない。セクション 1. で指摘した通り、辞書への記載は一時代前を反映する語が中心となるが、*Dr.J* でも Shakespeare や Dryden など 17 世紀の作家の例が多数を占めている。ちなみに、John Ash (1724-1779) の *THE NEW AND*

*COMPLETE DICTIONARY OF THE ENGLISH LANGUAGE* (初版 1775 : 以降 *Ash*) においても “half” が名詞と副詞の品詞別に記載され、*half-compound* も比較的多くの見出し語が品詞別に入れられている。大部分が *Dr.J* と重なってはいるが、*Dr.J* では扱われていない語を示しておく、名詞では “half-crown,” “half-file,<sup>29)</sup>” “half-guinea,” “half-indele<sup>30)</sup> (half-indole),” “half-pound,” “half-seal,” “half-sister,” 形容詞では “half-bred” である。この “half-bred” は、*NGED*<sup>17)</sup> (1794) にも “mean, base, degenerate, imperfect” というネガティブな意味で記されているが、ほぼ同じ “Mean, degenerate” (*Ash* の定義) を意味する “half-blooded” や “Defective in the understanding” (同 *Ash*) で定義される “half-witted,” さらには「序」に挙げた “half-baked,” “half-portion” からも窺えるように、*half-* の複合語が意味的に中立ではない。「程度」を表す複合語は、*OED*<sup>2)</sup> の “half” の *adj.* の 4 項の “As a measure of degree: Attaining only half-way to completeness or to the actual action, quality, or character in question; falling short of the full or perfect thing” の延長線上の「達して (満たして) いない」→「不完全な」といったマイナスのニュアンスを帯びていることが多い。ただ、このような「程度」「度合い」を表す慣用句、複合語については、18 世紀の辞書の収録数は十分と言うにはほど遠く、Richardson 以降の小説で盛んに使用されるようになった感情表現に類する複合語の記載は殆ど見当たらない。

## 5. 結語

これまでの考察により、Richardson の心理描写の技巧は、“half” の使用法においても発揮されており、彼の作品には、繊細な心の動きを表す句や *half-* の複合語が多種多様に用いられていることが明らかになった。とりわけ最後の書簡体小説である *SirCG* には Richardson の文体的特徴が際立って現れ、文学作品としての価値は別として、言葉の創造性・多様性という点では、*Pam* よりも *Cl* や最後の小説である *SirCG* の方に、より注目したいところである。

同時代の辞書については、脇本 (2017) で調査したところ、*self* の複合語においては、18 世紀中庸から後半にかけて *Dr.J* や *Ash* では多数収録されるようになったことがわかったが、他方、本稿で調査した *half-* の複合語については、Richardson 以降著しく増えた感情表出に繋がる語の記述が追いついておらず、フィクションの言葉と辞書の記載は一特にこの *half-* においては一かなり乖離していることが窺えた。英語は柔軟性に富む言語であるが、Dr. Johnson といえども、作家の自由な発想による語形成を前に足踏みをし、辞書への収録には至らなかったのではないかと察せられる。それがやがて 19 世紀以降、*OED* の前身である *NED (A New English Dictionary on Historical Principles)* を経て、*OED* において大幅なる改訂が施された。引いては、*OED*<sup>2)</sup> や最新の *OEDonline* における夥しい収録数へと膨れ上がり、今後もさらに増え続けるものと思われる。

## 注

- 1) 下線部は筆者による強調。以下すべての下線部、網掛け、四角枠も筆者による強調。
- 2) *OED*<sup>2)</sup> の “half-baked,” *adj.* の 1., 2. の項より。

- 3) *OED*<sup>2</sup> の *half* in *comb.* II. n. “In specific combinations” より (*OEDonline* では見出し語 “half-portion,” *n.* として記載)。
- 4) *OED*<sup>2</sup> では “halve” の “*Obs. and dial. f.*” とあり、用例が 1889 年のみの唯一例である。
- 5) *OEDonline* は、年に 4 回 (3 ヶ月単位で) 更新・改訂が行われるが、本稿で使用している情報は 2016 年 10 月現在のものである。
- 6) *NED* には John Kersey という明確な記載ではなく、“By J. K.” となっている。
- 7) 辞書によってハイフン付きとそうでないものがあるが、ハイフン付きの方に統一している。ハイフンがなく、もともと一語の表記になっているものはそのまま記す。
- 8) 見出し語の初出年、あるいは *half* の項における具体例の初出年ではなく、*OED*<sup>2</sup> の全例文中における最も古い例の年号である。
- 9) 本稿で使用するコーパスは、基本的に Chadwyck-Healey 社の “Eighteenth-Century Fiction Full-Text Database,” もしくは “Early English Prose Fiction Full-Text Database” である。
- 10) Chadwyck-Healey の電子テキストでは “half dead” にハイフンが付いていないが、Project Gutenberg ではハイフン付きである。このように、版によってハイフンが付いたり付かなかったりする。ちなみに、*OED*<sup>2</sup> の *half* (in *comb.*) の解説に “The two elements are often written separately when the *adj.* is in the predicate (see *HALF adv.* 1)” と記されているように、形容詞が叙述用法の際にはハイフンを介さないことが多い。
- 11) *sic.* *OED*<sup>2</sup> によると、“linnen” は “linen” の 11-18 世紀の異形 (variant form) である。
- 12) この形の動詞用法は 注 4) で既述の通り 1889 年が *OED*<sup>2</sup> の唯一例で、1722 年発行の *Moll* で動詞として使用されているのは稀なケースと思われる。
- 13) *sic.* *OED*<sup>2</sup> によると、“eraze” は “erase” の 17-18 世紀の異形である。
- 14) これら 2 つの表現においては、広く解釈すれば *half*- を連結形とする複合動詞とも考えられるが、ここでは “half” を後続の過去分詞を修飾する副詞と見ている。
- 15) Aphra Behn (1640-1689) の *Oroonoko* (1688) は約 3 万 1 千語しかなく、*RC*, *Moll* や *GT* と総語彙数に開きがあり、“half” の頻度もわずか 6 回に過ぎないため、本稿での比較としては扱わなかったが、6 回のうち 5 回が何らかの程度に繋がるものなので (“half assur’d,” “have a half Diversion,” “the half-feigning Youth,” “he half perswaded(*sic.*) her,” “I lost half the satisfaction”), 内容 (例えば、冒険物か心理小説かなど) に拠る違いの可能性も考え得る。なお、“perswade” は “persuade” の 16-18 世紀の異形である。
- 16) 本稿では Richardson の作品においても、全て Chadwyck-Healey 社の “Eighteenth-Century Fiction Full-Text Database” のテキストを使用。なお、紙面の都合上、説明文中での例については作品名の表記に留める。
- 17) *Pam* の主役である Pamela が小間使いの時は *PamI* (Vol. I., II.), Mr. B の正妻になってからのストーリーは *PamII* (Vol. III., IV.) で、二つをまとめて言う場合は *Pam* とする。
- 18) Defoe の *Robinson Crusoe* (1719), Swift の *Gulliver’s Travels* (1726), Henry Fielding の *Joseph Andrews* (1742), Oliver Goldsmith の *The Vicar of Wakefield* (1766) と比較した調査である。詳細は脇本 (2007: 124) を参照。

- 19) det.: determiner の略。その他、本稿で使用している略語は次の通りである：  
a : (in dates) ante / attrib : attributive(ly) / c : (in dates) circa / comb : combination(s) /  
dial. : dialect / exc. : except / f. : formed on, form of / fig. : figurative(ly) / Hist. : History,  
historic(al) / Let. : Letter / obs. : obsolete // † : obsolete
- 20) このような冠詞を挟む例は、*OED*<sup>2</sup> の “half,” *adj.* の 1.b, 1c. の項の基本的な例である。
- 21) この “half-word” は、ある意味 *PamI* に独特の表現であるが、詳細は脇本 (2007) 参照。
- 22) *OED*<sup>2</sup> の “score,” *n.* III. (16a.) より。
- 23) *OED*<sup>2</sup> の “acknowledging” *ppl. a.* では †マークが付き、1750-1 が最終例の廃語である。
- 24) 例えば、*OED*<sup>2</sup> の “half” *adv.* 1. c. の動詞を修飾する例に、ハイフン付きの “half-hiding” (1910)(1918) が 2 例ある一方、*half* の 3. の動詞と結びつく例にハイフンのない “I half believed that . . .” (1849), “. . . is half reclining on a sofa” (1850) がある。Richardson の作品においても Chadwyck-Healey と Gutenberg のテキスト間に違いが見られる。
- 25) *OED*<sup>2</sup> の “whet,” *n.* 2. b. の項, “sot,” *v.* 2. の項, 及び “tip,” *v.* 2. 10. の項参照。
- 26) 例えば Zandvoort (1975<sup>7</sup> [1957]: 39) 参照。18 世紀に使用されていたかどうかについては、小野・伊藤 (1993: 127) 参照。
- 27) *OED*<sup>2</sup> の 1728 年からの用例から取ったもので、16 世紀より PE に至るまで使用されている “basin” の異形である。
- 28) 比較の対象となった 8 作品の略記は以下の通りである：*UT: The Unfortunate Traveller* (1594), *Inc: Incognita* (1692), *Moll: Moll Flanders* (1722), *GT: Gulliver’s Travels* (1726), *TS: Tristram Shandy* (1759-67), *MF: The Man of Feeling* (1771), *HC: Humphrey Clinker* (1771), *Eve: Evelina* (1778)。
- 29) *DAB* に複数形で載せられていた “half-file” は、*OED*<sup>2</sup> では見出し語としての記載はないが、*Ash* では意味も明確に示されている。その *Ash* の定義を書いておくと “The three foremost men of a battalion, the three hindmost men of a battalion.” である。
- 30) *sic.* *Ash* によると、Chaucer の用語で “obsolete” と記されている。

#### 引用文献

- Austen, Jane. (1813) *Pride and Prejudice (The Oxford Illustrated Jane Austen)*, R. W. Chapman ed., Oxford University Press, Oxford & New York, 1932<sup>3</sup> [1923].
- 小野 捷・伊藤 弘之. (1993) 『近代英語の発達』(英語学入門講座・第 6 巻), 英潮社, 東京.
- Simpson, J. A. & E. S. C. Weiner, eds. (1989<sup>2</sup>) *The Oxford English Dictionary*, Second Edition on CD-ROM Version 4.0 (2009), Clarendon Press, Oxford.
- Uhrström, Wilhelm. (1907) *Studies on the Language of Samuel Richardson*. Almqvist & Wiksell, Upsala.
- 脇本 恭子. (2007) 「Richardson の *Pamela* についての一考察—語形成の面から—」, 『岡山大学教育学部研究集録』, 第 134 号, 岡山大学教育学部, 119-28.
- (2008) 「Samuel Richardson に辿る Sentimentalism の源流—語形成の観点から—」, 『近代英語研究』, 第 24 号, 近代英語協会, 43-74.



- (2017) 「18 世紀の辞書に見る *Self-Compound*—Shakespeare の使用に比較して—」,  
『ペルシカ』, 第 41 号, 岡山大学英文学会, 27-48.
- Watt, Ian. (1957) *The Rise of the Novel: Studies in Defoe, Richardson and Fielding*.  
University of California Press, Berkeley & Los Angeles.
- Zandvoort, R. W. A. (1975<sup>7</sup> [1957]) *A Handbook of English Grammar*, Longmans, Green and  
Co., Ltd., London.

オンライン・ソース

[Dictionaries]

ECCO:

<URL=<http://www.gale.com/primary-sources/eighteenth-century-collections-online/>>.

Ash, John. *THE NEW AND COMPLETE DICTIONARY OF THE ENGLISH  
LANGAUGE* (初版 : 1775).

Bailey, Nathan. *An Universal Etymological English Dictionary* (初版 : 1721)(第 28 版 :  
1800).

Boyer, Abel. *THE ROYAL DICTIONARY ABRIDGED* (初版 : 1708).

Bullokar, John. *THE English Expositor IMPROVD* (第 10 版 : 1707).

Dyche, Thomas & William Pardon. *A NEW GENERAL English Dictionary* (初版 :  
1735)(第 17 版 : 1794).

Johnson, Samuel. *A DICTIONARY OF THE ENGLISH LANGUAGE* (第 4 版 : 1773).

Kersey, John. *A NEW English Dictionary* (初版 : 1702)(第 2 版 : 1713)(第 3 版 : 1731)  
(第四版 : 1739).

----- *Dictionarium Anglo-Britannicum* (初版 : 1708).

Martin, Benjamin. *Lingua Britannica Reformata* (初版 : 1749).

*Oxford English Dictionary Online*: <URL= <http://www.oed.com>>.

[E-Texts]

Literature Online: <URL=<http://literature.proquest.com/marketing/index.jsp>>.

Behn, Aphra. (1688) *Oroonoko: or, The Royal Slave*.

Defoe, Daniel. (1719) *Robinson Crusoe*.

----- (1722) *Moll Flanders*.

Richardson, Samuel. *Familiar Letters* (1750<sup>4</sup> [1741])

----- (1740-41) *Pamela: or, Virtue Rewarded*, in 4 Vols.

----- (1747-48) *Clarissa: or, the History of a Young Lady*, in 8 Vols.

----- (1753-54) *The History of Sir Charles Grandison*, in 6 Vols.

Swift, Jonathan. (1726) *Gulliver's Travels*.

Project Gutenberg: <URL=[http://www.gutenberg.org/wiki/Main\\_Page](http://www.gutenberg.org/wiki/Main_Page)>.